やがて又神意を畏みて命の如く仕立て、さし上げたる時神傳、平生よりは高く烈しき御聲にて下りたり

『金子大明神此幣を切り堺に、肥灰差し止める

から、其分に承知せよ、外家業を致し、農業へ出で人が參り、呼びに來て皈り、又農業へ出で、又も呼びに來、農業する間も無し、參詣に來た人も待ち、兩方の差支に相成る、今日限り家業を止めてくれぬか、其方四十二歳の時、病氣で醫者も手を放し、心配し神佛に願をかけ、全快致し、其時死んだものと思ひ、慾を放れて神の道を立てゝ吳れ家内は後家になつたと思ひ吳れ、後家よりは優し、物も云はれ、相談もなる、小供伴れてぼつ〳〵農業して居てくれ、此方の樣に、實意を以て丁寧に神信心致し居る氏子が、世間では何ばうも難義して居る、取次ぎ助けて遣てくれ、すれば神の道も立ち、氏子も立ち行く、氏子あつての神、神あつての氏子、繁昌致し、末々親にかゝり、子にかゝり、相よ互よで立ち行く』

是實に立教の神宣なりき、即ち神は、文治郎を家業より退かせ、專ら廣前に端座して神と氏子（信者）との間に立ち、神の御教を直々に氏子に傳へ、氏子の願ひを其儘神に取次ぎせよ、と命じたまふなり、世に人は多し、神信心をもて念とする